

工事の げんば 現場より

亭榭保存修理事業

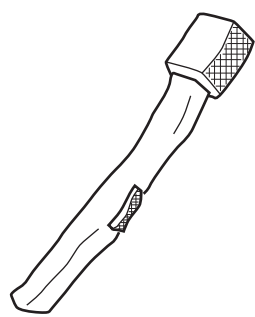
今はこんな様子だよ。

8月5週目



なかなか暑さが去らず天候不安の日もあった中、素屋根内では檜皮葺屋根が少しずつ葺きあがってきています。四方唐破風という複雑な曲面からなる屋根を、全体の形を見ながら、また細部にも抜かりが無いように丁寧に形を作り上げていきました。特殊な形状ゆえ、とくに腕利きの職人が関わり、現場内にはリズムカルな槌音が響き渡っていました。

かなづち



竹くぎを叩き打つ時に使います。竹くぎと一緒に握りこんで使うので、柄の形は使う人により様々。使い勝手が良いように、柄は自作するのが殆どだそうです。

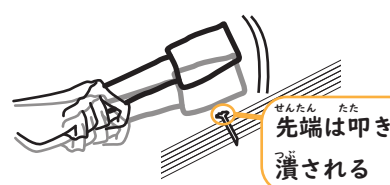
竹くぎの打ち方



①口に含んだ竹くぎを、尖っている方を内側にし一本ずつ口から出します。



②口から出したくぎを、かなづちの柄と一緒に握りこみ、柄の途中の金具を使って押し込みます。



③押し込んだ竹くぎを、かなづちの上の部分で「トントン」と叩いて打ち付けます。



曲面と曲線を描きながら檜皮を並べ、竹くぎや金釘で止めていきます。大まかな下地はありますが、面は檜皮で作られます。



4つの唐破風がぶつかる谷部分は屋根勾配が緩く、雨漏りの危険性が高いため、雨漏り予防の防水シートを敷きました。



檜皮は葺く際に濡らして柔らかくして使うため、葺いた直後は濡れた濃い色をしています。徐々に乾いて淡い色になります。



頂部はほぼ水平ですが、檜皮が逆勾配（中に水が入ってしまう向き）にならないように傾きに気をつけて葺いていきます。